

HUKUTANA

September 2025 | Issue 45

コンテンツ

ご挨拶	p. 1
寄稿 1	p. 2
寄稿 2	p. 6
雑記	p. 8
活動記録	p. 9
活動予定	p. 10



ケニア北部、トゥルカナでのダイアログの様子 2024年1月撮影山根裕美

ご挨拶

ナイロビ研究連絡センター60周年を迎えます

ナイロビ研究連絡センター
山根裕美

日本学術振興会ナイロビ研究連絡センターは、今年60周年を迎えました。60年前のナイロビがどんな様子であったのだろうかと思いをはせると、戻らないその時間を不思議な気持ちで想像する自分がいます。

今年度中（2月を予定）にささやかではありますが式典を催す予定でおりますので、お集まりいただければありがたいと思います。現在、準備調整中ですので、改めて日時等をお知らせさせていただきます。



Milima haikutani, lakini
binadamu hukutana. 山と山とは
出会わないが、人は出会うもの
だ。（スワヒリ語のことわざ）

ナイロビのニュースレターは1998年4月30日に第1号が発行されました。その後、一時中断した時期が続きましたが、なんとか復活させようという思いで、今回、第45号を発行するに至りました。今回は、国際競争力強化研究員でケニアに派遣されている林愛美氏とJSPS東アフリカ同窓会の会長をされている、タンザニア、ドドマ大学のProf.Makangara氏にご寄稿をお願いし、快く引き受けていただきました。

8月、まだまだ寒いナイロビでしたが、日本の夏休みということもあり、多くの研究者の方々にお寄りいただき、センターは賑わいをみせております。ケニアご投稿の際はぜひ、お立ち寄りください！

共に学び、共につくること ー「アフリカから学ぶ」の先へー

林愛美氏

明治大学／日本学術振興会、
国際競争力強化研究員（CPD）

<筆者紹介>

大阪大学言語文化研究科博士後期課程修了。博士（言語文化学）。専門はアフリカ地域研究、ジェンダー研究、文化人類学。現在、明治大学／日本学術振興会・特別研究員-CPD、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・共同研究員、放送大学渋谷学習センター非常勤講師。

主な著作にFemale Genital Mutilation/Cutting : Global Zero Tolerance Policy and Diverse Responses from African and Asian Local Communities (分担執筆、Springer、2023)、『グローバルディスコースと女性の身体：アフリカの女性器切除とローカル社会の多様性』（分担執筆、晃洋書房、2023年）、『負債と信用の人類学：人間経済の現在』（第8章翻訳、以文社、2023年）などがある。

私は大学院博士前期課程から、ケニア西部に暮らす牧畜民マサイの社会において通過儀礼として行われてきた「女子割礼」／女性器切除（Female Genital Mutilation: FGM）についての人類学的な研究を行ってきた。

女性器切除というのは一見ギョツとする言葉だが、これはいわゆる女子の「割礼」を指す。「女子割礼」／FGMとは、通過儀礼などの文化的理由によって女性器に加工を施す慣習のことである。WHO、UNICEF等国際機関によると、FGMは慣習としてアフリカを中心に実施されてきたが、女性の心身へ与える影響が深刻で

あることから、長らく廃絶に向けた議論や取り組みが行われてきた。2015年にSDGsのアジェンダにFGM廃絶が盛り込まれたことでこの語は日本でもだいぶ広まった感があるものの、未だ一般的な用語ではないだろう。かつての研究では、男子の「割礼」と対になる実践という観点から、現地語の訳語として「女子割礼」という言葉が用いられていた。植民地期のミッシヨナリーや植民地政府も、英語で男性の割礼を示す単語 *circumcision* を用いて *female circumcision* と呼んできた。しかし、1979年にアメリカのフェミニスト、フラン・ホスケンがこの慣習の廃絶キャンペーンの中で、*circumcision* では男性と女性の実践の差異を表現できず、混乱を招くという理由からFGMという言葉を使い、この慣習の暴力性を世界に示し、廃絶を呼びかけたことをきっかけに徐々にFGMという語が定着していった（中村 2021）。したがって、女性器切除という衝撃的な表現に驚かされるのは当然なのだ。

私はこの慣習を地域研究／文化人類学的に研究するべく、2012年に初めてケニア西部のマサイランドを訪れた。それ以来、約13年間にわたってこの土地の人びとと付き合うことになるとは思ってもいなかった。主な研究上の関心は、FGM禁止法や廃絶運動といったこの慣習を禁止する圧力と、一方で通過儀礼としてこの慣習を強制する「力」との狭間でマサイの女性たちはどのように生きているのか、ということだった。ただし今回は、この研究の成果ではなく、ケニアにおいて調査・研究活動をどのように行ってきたかという「背景」についてお話ししたい。研究の詳細にご関心のある方には、林（2023, 2021, 2018）を参照して頂ければ幸いである。

前置きが長くなったが、私は2022年10月に日本学術振興会の国際競争力強化研究員（CPD）に採用され、その後、世界的な感染症とケニア大統領選挙が終わるのを待って、2023年8月に渡航した。ケニアでは、米国国際大学アフリカ校（United States International University-Africa: USIU-A、以下文中ではUSIU-Aと表記）に受け入れて頂き、校内の教職員寮に入居させてもらった。寮では、ケニアで時折発生するネズミによる被害や巨大な虫たちとの闘い、水シャワー、大学校内イベントの「騒音」に悩まされたが、それでもナイジェリア、南アフリカ、インド、スペイン、アメリカからの研究者らと日常的に交流するなど貴重な経験をする事ができた。

受入大学のある首都ナイロビでは、国際セミナーや国際シンポジウム、大学での講演会などを実施する機会に恵まれた。2023年10月には在ケニア日本大使館にて、ナイロビ大学とオックスフォード大学の法学者らとケニアのジェンダー平等に関する国際セミナーを開催した。そこで初めて、在地のジェンダー研究者の前でマサイの地域で行われているFGMとその廃絶運動に関する口頭発表を行なった。その時出会った研究者らと同セミナーの発展形として2024年には国際シンポジウムを企画・開催する運びとなった。

国際シンポジウムでは、恐れ多くも実行委員長を務めさせて頂いた。過去に日本の学会大会の運営をお手伝いしたことはあったものの、ケニアで在地の研究者や活動家らと連携しながら一緒にシンポジウムを組織するのは並大抵のことではなかった。

約一年をかけて学振ナイロビ研究連絡センター、ナイロビ大学、ケニヤッタ大学、オックスフォード大学、そして受入校USIU-Aの研究者らから支援を得て少しずつシンポジウムを形にしていっていった。英語や国家語のスワヒリ語での企画書や予算案の作成、企画会議の主催、教授らを前にしての会議の進行、ケニアの有識者との登壇交渉・・・何もかも初めての経験だったが、

運営委員会のメンバーから多大な支援を受けて何とか進めることができた。ほとんど学生指導に近い支援を受けることも少なかった。運営委員会は意図せずしてほとんど女性の研究者で構成され、全員がジェンダー分野にも明るい研究者であった。また、FGMの慣習を持つマサイやソマリといった民族出身の研究者や活動家らからも企画会議を通じて多くの助言をもらうことができた。

これまでアフリカ在地の研究者と共同研究を行ってきた日本の研究者は多数いるが、ジェンダー分野の、とりわけ女性研究者との共同研究や成果発表を実施した例は数少ないだろう。これは、かつてはケニアに女性研究者が少なかったことが背景として考えられるが、今や彼女たちは大学組織の中で少数ではあるが重要な地位を占めるようになってきている。ただし彼女たちはエリートではあるものの、家庭や故郷における家父長的なジェンダー規範の中で葛藤も抱えており、企画会議ではそうした研究者ら自身の経験も共有された。例えば、首都ナイロビでは大学教員としての社会的地位を有する女性であっても、故郷のある地方においては「〇〇家の（婚出していった）娘」である。したがって彼女は、慣習法に基づき土地をはじめとする父親の財産を相続することはできないそうだ。

シンポジウムでは、研究者のほか、政策立案者や活動家にも登壇してもらい、最後にはフロアを交えて丸一日かけてジェンダー課題に関する議論を行った。彼ら／彼女らはケニアやアフリカのジェンダー課題を学術的、政策的、実践的分野において議論し、グローバル、ナショナル、ローカルなど様々なレベルにて、多種多様なアプローチでもってその解決に取り組んでいる。私は、こうした人びとがケニアや諸外国のジェンダー状況を生きつつ、その課題を解決すべく取り組むアクターとして実際に「課題」を取り巻く世界を構成していること、もちろんそこに自分も含まれること、そして図らずも会議がその縮図のようになった

ことを奇妙な気持ちで見ている。これまで、一定期間ケニアと付き合ってきたつもりでいたが、フィールドワークをすることと在地の研究者と共に研究や成果発表を実施するのでは見える景色が大きく異なることを知った。

さて、ナイロビの話が長くなってしまったが、もちろんケニア西部のマサイの村にも通うことができた。村の人びとは私が仕事を心得てケニアに戻ってきたこと、3年にも渡って長期滞在することを大いに喜んでくれた。

村の人びとは、13年前に突然村を訪れた私を受け入れてくれて以来、毎度再訪する度に歓迎してくれた。「ねだりの文化」を有するマサイの人びとは、私のことをいつも歓待してくれ、私にさまざまな要求をしてくれる。それは、先輩研究者の言葉を借りれば、彼らなりの社会関係の紡ぎ方なのだ。私は金銭や物や機会に関する様々な要求を喜んで受け取ったり、時に受け流したりしてきた。

そんな村で、女性たちの生き様を10年以上にわたって見せてもらった。これまでの研究では、マサイの女性たちはグローバル世界の中で、国家の中で、そして家父長的な民族社会の中で多重に抑圧され、その上さらにFGMまで課されているように描かれてきた。また、民族誌的研究は、マサイの女性たちが独自の民族文化に基づいた独自の生活を送り、独自の思考をすると伝える。彼女たちはFGMの被害者か、もしくはそれらを軽やかに乗り越える「主体的」な存在なのか。事実の一面は、確かにそうだ。しかし私が出会ったマサイの女性たちは、もっと複雑だった。少なくとも「犠牲者」の様に声を奪われ、過去の中に立ち尽くしてはいなかった。彼女たちは自身が置かれた男性優位社会や困難な経済状況を冷静に観察してその打開策を探り、道を切り開いている。他方、時にどうしようもない状況に直面して涙し、打ちひしがれたりもする。彼女たちは少しのあいだ境遇を嘆くものの、しばらくすると立ち直って

また解決策を探り始め、家族や友人、村の人びとに助けられながら再び前に進む。

その意味で彼女たちは、日本に暮らす人びとの多くと変わらない。周囲より心身ともにタフな女性もいれば、繊細で思い悩む性格の女性もいる。タフな女性が涙に暮れる日もあれば、いつも他人に頼ってばかりだと言われる人が時にリーダーシップを発揮したりもする。結婚直後は子育てや家事について婚家に頼りきりだと揶揄されていた女性が、数年後には3人の子どもを出産・養育し、小規模ビジネスを始め、教会でコーラス隊のリーダーになって年少の女性たちを指導していたりする。婚外子を出産した後で第二夫人として村に嫁いだことで後ろ指をさされてきた女性が、10年後には夫と共に息子の割礼儀礼を見事に取り仕切っていたりする。彼女たちは様々な顔をもつ。タフな人にも脆い部分があり、繊細な人が大胆な一面を見せたりもする。頼りないと思われていた女性が時を経て思いがけず生き抜く術を獲得したりする。もし彼女たちに共通点があるとすれば、それは「くさらずに生き抜いている」ことだろう。この年月でマサイの女性たちから教わったのはそのことだ。

これまではケニアを調査地とし、ケニアから学ぶこと、ケニアの社会や文化の一側面について明らかにすることに注力してきた。しかしこの度の滞在では、ケニアのアカデミアに片足を踏み入れ、在地の研究者と共に議論を深め、研究を深化させることに取り組んでいる。アカデミックな作業は首都の「エリート」と共に行うことが多いものの、この活動の背景にはマサイの人びとから受けた膨大な「贈与」があることは疑いようもない。私は時折フィールドに研究のアイデアや考察を持ち帰っては、彼ら／彼女らと議論をする。例えば、「ババ（お父さん）、この婚姻儀礼で贈答品として現金が送られる可能性はあると思う？」「いや、私たちはそんなことはしないよ。儀礼で現金が贈られても受け取らないか、もしくは数えないという方策をとるんだ。



【写真上 教会】

マサイの村の教会。毎週の日曜礼拝には両親に連れられ子どもたちも多く参加する。

【写真中 オルプル】

クリスマス前日、現代的になったオルプル（肉の祝宴）を囲むマサイの男性たち。

【写真下 婚資】

マサイの婚資の儀礼にて、花婿側親族を牛囲いの中で歓迎する村人たち。家畜の糞を踏むことで客人は祝福される。

撮影者：林愛美

これでマナミの先生たちは納得しそうかい？（笑）」といった具合だ。マサイの人びとは、私の「先生」であるだけでなく、共同研究者にもなってくれている。「ケニアと共に理論構築する」というと壮大なことに聞こえるが、そこに続くかも知れない長い道のりを歩きはじめたような気がしている。

誌面の都合で割愛したが、CPDに採用されて以降、イギリス、フランス、タンザニア、ガーナ、南アフリカを訪問し、各地の文化人類学、アフリカ研究およびジェンダー研究について学ぶ機会を得た。さまざまな地域を訪問するたび、自分が「専門」だとしていることについて、知らないことが山ほどあると思い知らされる。

フィールドは、研究は、いつも自分に問いを投げかけてくる。さまざまな問いの答えを、マサイの人びとの土地で追い求めることができる。研究者としてこれほど幸せなことはないだろう。このような貴重な機会を頂けること、そして滞在生活と研究活動を支えてくださる皆様には心からの感謝を伝えたい。

犠牲祭（Eid ul-Adha）を祝う
イスラム教徒で賑わうナイロビの喫茶店にて

参考文献

- 中村香子（2021）「グローバル・ディスコースとアフリカの女性器切除」宮脇幸生ほか（編集）『グローバル・ディスコースと女性の身体—アフリカの女性器切除とローカル社会の多様性』晃洋書房。
- Hayashi, Manami (2023) “Chapter 7: Research Note on a Grassroots Movement to Eradicate Female Genital Mutilation/Cutting Among Kenyan Maasai,” Nakamura et al. (ed.) Female Genital Mutilation/Cutting: Global Zero Tolerance Policy and Diverse Responses from African and Asian Local Communities, Springer.
- 林愛美（2018）『ケニアのマサイ社会におけるFGMに関する研究—ジェンダーの視点を中心に』博士論文（大阪大学言語文化研究科）、全223ページ。
- （2021）「草の根のFGM/C廃絶運動と地元住民—ケニア・マサイの事例から」宮脇幸生ほか（編）晃洋書房。

THE EASTERN AFRICA JSPS ALUMNI ASSOCIATION

**Written by Dr. John Joseph
Makangara**

**Associate Professor of Organic
Chemistry at the University of
Dodoma
Current Chairperson of The
Eastern Africa Japan Society**

My name is Dr. John Joseph Makangara, an Associate Professor of Organic Chemistry at the University of Dodoma. My main activities are teaching, research and supervision of both undergraduate and postgraduate studies. My research interests are mainly on studies of natural products from medicinal and other plants and forensic sciences specifically drugs of abuse.

I am the current Chairperson of The Eastern Africa Japan Society for Promotion of Science Alumni Association (EA JSPS AA), which was launched on the 30th July 2007, under the first Chairmanship of Professor Shaukat Abdulrazak. The aim of the EA JSPS AA was to promote scientific exchange and research collaboration in all fields of humanities, social sciences and natural sciences between Japan and Eastern Africa countries, as well as develop a network and encourage scientific cooperation amongst the Association's members. Membership of the Association is open to all persons who have received support under JSPS programmes.



【写真 ケニア国立博物館にて】
毎年恒例となっている東アフリカ同窓会理事
会およびワークショップを開催。その
後、国立博物館所属の会員の案内による見
学風景。(2024年10月24日)

撮影者：山根裕美



Since the Alumni Association's founding, a number of activities have been successfully carried out, including holding workshops to raise awareness of JSPS programs at a number of universities, including the University of Dodoma, Dar es Salaam University College of Education-Tanzania,

Kyambogo University in Uganda, the University of Zambia in Zambia, Jomo Kenyatta University of Agriculture and Technology in Kenya, Addis Ababa University of Science and Technology in Ethiopia, an Giving applicants for the various JSPS programs the information they needed was the goal of these sensitization sessions. Additionally, since 2010, there had been the BRIDGE Fellowship, from which several qualified applicants have benefited from it. In general, in the early days, the members of the association were very active and positive in various communication.

ON behalf of the Executive Committee and the whole community of the EA JSPS AA members would like to thank the current director, Dr Yumi Yamane for the efforts she has invested in the revival of

the Alumni Association activities which were temporarily suspended during the outbreak of the COVID-19 pandemic. She has been instrumental in the association's revival since her appointment, because under her patronage on behalf of JSPS, we are working on the expansion of the association activities beyond the Eastern Africa region to cover Sub-Saharan Africa, which includes Central, Western and Southern Africa. Initial visits/contacts by the director enabled some members from West Africa to participate in the 2024 hybrid General Assembly. As EC members, we appreciate the efforts being done to building a vibrant EA/Sub Saharan JSPS AA.

【写真 米国国際大学 - アフリカ キャンパスでの、シンポジウム】

2024年11月14日に米国国際大学
で開催された、シンポジウムの様
子。東アフリカ同窓会会員のProf.
Kennedy Mkutuが座長となり、同
理事であるProf.J.C. Onyangoが司
会を務めた。

撮影者：稲角暢



ナイロビ研究連絡 センター内

雑記



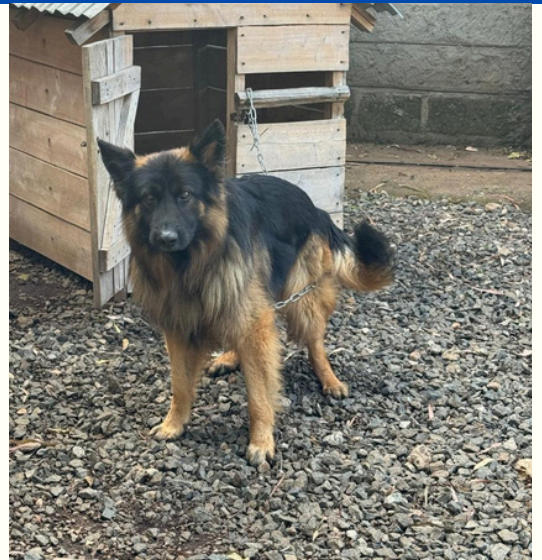
2024年9月に、番犬のキングが亡くなりました。ちょっと変わり者のキングでしたが、ナイロビ研究連絡センターをしっかりと守ってくれていました。老化に伴う腎臓疾患でした。ナイロビ研究連絡センターでは、常時3頭～4頭の番犬が仕事をしてくれていましたが、キングが亡くなった時点でロイボン1頭になってしまいました。キングがいなくなり、ロイボンは目に見えて落胆し元気がなくなってしまい、驚くほどでした。そこで急いで新しい番犬2頭をむかえることにし、現在は、2022年に学振に加わったロイボンに加え、ケニアの保護犬施設からきたザンビア、ガーナの3頭が、ナイロビ研究連絡センターを守ってくれています。

副センター長より ひとこと

ナイロビ研究連絡センター
稲角暢

2024年3月半ばに副センター長として着任した、稲角暢（いなずみのぶ）と申します。以前も同職に就いていたことがあり、2017年3月下旬～2022年4月上旬の期間、お世話になっておりました。

わたし自身、大学院にいた2011～2016年度、ケニア・バリング郡にて牧畜民の調査をしていたことがあります。その折には。駐在員のみなさまに、よく調査の話を聞いていただいていたものでした。現職に就いた後も、ご来訪いただくみなさまのお話を、いつも楽しみにしておりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



センター活動記録（2025年1月～8月）

月	事項
1月	198回学振セミナー 木村香純さん（京都大学）「出版言語とキリスト教宣教 植民地ケニアにおける「民族語」聖書の翻訳と頒布のイデオロギー」（会場： ナイロビ研究連絡センター）
3月	公開講義 高橋康介先生（立命館大学）（会場：ケニア山大学、ケニア）
	日本人研究者交流会（会場：ナイロビ研究連絡センター）
	JSPS本部より出張者2名。NACOSTI, NRF, 在ケニア日本大使館および大使、 JICAナイロビオフィス、国立博物館、ジョモケニヤッタ農工大学へ表敬訪問。
	日本語スピーチコンテスト（在ケニア日本大使館、ケニア日本語教師会主催） （会場：ウタリー大学、ケニア）
	日本語スピーチコンテスト（在ザンビア日本大使館主催）（会場：在ザンビア 日本大使館、ザンビア）
4月	学術セミナー（会場：カトリック大学東アフリカキャンパス、ケニア）
5月	留学生フェア（在ザンビア日本大使館主催）（会場：ザンビア大学、ザンビ ア）
	商船三井事務所訪問 研究協力関連打ち合わせ（商船三井、米国国際大学、 JSPS）（会場：商船三井ナイロビ事務所）
6月	エリトリア出張（在エリトリア日本大使館、科学技術大学、エリトリア外務 省、国立博物館マッサワなど訪問）
	NACOSTI主催：Science Conference ブース設置（会場：ナイバシャ、コン フェレンスホール）
	State Department, Science, Research, and Innovation in Ministry of Education. 担当長官Prof. Abdulrazak氏表敬訪問
	ケニア教育関連講義（オンライン）
7月	国立博物館（中務教授（京都大学）訪問）
	10月14日開催予定Green Transitionに関わる事前ラウンドテーブルミーティ ング、（米国国際大学、モナシュ大学、ケニア地方政府、森林局、ナイロビ研 究連絡センター他）（会場：米国国際大学アフリカキャンパス）
8月	東アフリカ同窓会ECミーティング（オンライン）

月	事項
8月	国際ワークショップ: Kenya-Japan Co-creation Workshop: Advancing Research and Interdisciplinary Cooperation. (ストラスモア大学、上智大学、東京理科大学、東京大学、ナイロビ研究連絡センター) (会場: ストラスモア大学)
	ArtFes Conference参加、事業説明およびブース設置 (会場: ケニヤッタ大学)

センター活動予定 (2025年9月～)

月	事項
9月	国際シンポジウム: Sports and Wellness in East Africa (筑波大学、ケニヤッタ大学、ナイロビ研究連絡センター) (会場: ケニヤッタ大学)
	国際シンポジウム: Situated Career Choices: University Education and Societies in Eastern Africa (マケレレ大学、弘前大学、ナイロビ研究連絡センター) (会場: 在ケニア日本大使館広報文化ホール)
10月	国際ワークショップ: The Green Transition: Global South Experiences (米国国際大学、徳島大学、ケニア地方政府、森林局、ナイロビ研究連絡センター他) (会場: 米国国際大学)
11月	東アフリカ同窓会ワークショップ&ミーティング (会場: 未定)
12月	同窓会会長会議 (学振本部)
	センター長会議 (学振本部)
2月	ナイロビ研究連絡センター60周年記念式典

ふくたーな HUKUTANA 第45号 (2025年9月 発行)
 日本学術振興会ナイロビ研究連絡センターニュースレター
 編集・発行者: 山根裕美



JSPS

NAIROBI
RESEARCH STATION

日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター
 Japan Society for the Promotion of Science, Nairobi Research Station
 P.O.Box 14958-00800, Westlands, Nairobi, Kenya
 Tel : +254-(0)20-4348000/+254 740 181283 (WhatsApp)
 Email : nbo-academia@overseas.jsps.go.jp